

## 創造と意志的契機

### ——プロティノスにおける「一者」∨と意志の問題

佐々木 裕 二

#### 1. 問題の端初

プロティノスにおける万有の創造・産出は、「必然的なもの」として捉える観方が強いが、その場合、「必然的」とはどのような意味に解すべきなのであろうか。

従来の主な解釈では、創造活動に際して、創造者の意志・自由な選択・合理的計画性などは一切排除されているものとして捉えられてきている。プロティノス自身も「Enneades」中の多くの箇所で、そのことを確かに主張しているのである。

そうすると、「必然的」と言う場合、創造の源泉ともいべき「一者」(ἓν, ἓν)∨<sup>(1)</sup>は、意志的契機以外の何らかの要因によって創造するのであろうか。例えば、「一者」∨が自己と全く異なり、自己の内部には含まれないものを産出するがゆえにこそ「生む」ことは「必然的」になされると考えられるのだろうか。また、自己の力を出し惜しみしたり、力の制御が思うが儘に出来ないためであるのか。<sup>(3)</sup>更にそれは、何らかの外部からの圧力や要求のために「生み出さざるを得ない」<sup>(4)</sup>のか。

これらの疑問は、「一者」∨が一切の存在を超越した「全く完全なるもの」であり、最高位の原理に相応しい「完全なる力の統御」を有しているという本性から卻けられねばならないであろう。「一者」∨は他から制約されたり、他から働きかけられたりすることのない、完全な「自足者」だからである。<sup>(5)</sup>

このように、「強制的ゆえ」に、「不完全さのゆえ」に「一者」∨が次位のもを産出するのではない

ことは、プロティノスも主張していることである。ところが他方では、 $\wedge$ 一者 $\vee$ は自己の本質を現成するうえで、「あくまでも自発的に、かつ、自由に自己の似像を生む<sup>(6)</sup>」という、先と相反するかのような内容が『Enneades』中に散見できる。特に、そのⅥ・8論文『 $\wedge$ 一者 $\vee$ の自由と意志について』では、 $\wedge$ 一者 $\vee$ に意志が認められること、また、意志の関与が創造にもあることなどが取りあげられている。

「 $\wedge$ 一者 $\vee$ それ自身は、それに続くものが生まれるか否か、またどのようなものが生まれるかについては何の関心も持っていない<sup>(7)</sup>」であるとか「 $\wedge$ 一者 $\vee$ は偶然に、また熟慮の末に全てのものを創造したのではない<sup>(8)</sup>」などの創造における意志的契機の一連の否定が述べられている一方で、他方、それを肯じるといふ一見矛盾した言明を彼が呈示しているのはどういう理由があるのだろうか。

かくしてプロティノス自身の裡では、創造における創造者の意志的契機が実際はどのように扱われているのか——それはやはり否定されるべきものなのか、それとも肯定できるものなのか、両者のいずれでもないのか——という疑問が吟味されなければならない。本稿の課題は、彼の言う「意志」とは何であるかについて $\wedge$ 一者 $\vee$ の性質に視座を定め、それを解釈しつつ、創造に関する彼の見解の断面を辿ろうとするものである<sup>(9)</sup>。

## 2. $\wedge$ 一者 $\vee$ と意志

さて、その意志とは $\wedge$ 一者 $\vee$ にとってどのようなかわり方をするのであろうか。この問題を考えるにあたって、 $\wedge$ 一者 $\vee$ それ自身とその産出活動について観望してゆかなければならない。

$\wedge$ 一者 $\vee$ の創造・産出は『Enneades』の随所で、意志・企図・合理的計画のもとになされるのではなく、創造力・産出力の「自然な発出」によってなされることだが、宇宙の永遠性に関連して述べられ

ている。プロテイノスが産出を $\wedge$ 一者 $\vee$ の「力のおのずからなる発露」<sup>10</sup>と説明する根柢には、謂わばそれが $\wedge$ 一者 $\vee$ の本質的な活動であり、何らかの原因・背景によるのではないという考え方があつたのは先に観たとおりである。究極的には、 $\wedge$ 一者 $\vee$ に対して何らかの属性を附与し帰属させる考えが否定されていることも含まれていると考えられてくるのである。

プロテイノスによれば、 $\wedge$ 一者 $\vee$ とは、最高にして完全であり、最も単純なる者であるがゆえに、意志・自由・自在な力、思慮・有性などは一体化しているとされる。それは寧ろ、諸属性が単一の性質として完全に包摂されていると考えてよいだろう。 $\wedge$ 一者 $\vee$ においては「有る」ことも「意志」も一体化していることから「彼（一者）」は意志するように存在し、存在するが儘に意志する」と言うことができ、W 8・13では以下の様に明示されている。

「彼は自分自身と和合して、自己であることを意志し、自己が意志するものとして現にある。意志と自己とが一なのである」。

全く単一なる者の $\wedge$ 一者 $\vee$ に対して、意志や思惟など何らかの属性を想定することにより、 $\wedge$ 一者 $\vee$ の自己内部に、主体-対象という二分化を挿入することは「一」の分割を否定することである。この場合「一」とは、「多」が有機的にその儘の形で統合されたひとつの複合体であるという意味ではない。 $\wedge$ 一者 $\vee$ の単一性（単純性）とは、 $\wedge$ 一者 $\vee$ がそれ自身の中に如何なる関係、如何なる区別、如何なる分割可能性も含まない「絶対的な無関係性」としてのみ言いうるのである。プロテイノスが説明する場合も、我々の未熟な言葉では $\wedge$ 一者 $\vee$ の「一」なる性質は説明しきれないと断わっており、常に慎重に、 $\wedge$ 一者 $\vee$ の本質や属性はあくまでも仮想的な表現であり、実際にそうなのではないと彼は強調している。

さて、この $\wedge$ 一者 $\vee$ の性質を捉えたいうえで、 $\wedge$ 一者 $\vee$ は産出においてどのような様相を示すのかを

次に吟味してみたいと思う。

しかし△一者▽の産出を考えるまえに、△一者▽は果たしてどのような成立したのかという問題も考えねばならない。△一者▽が他から一切原因されないことは、△一者▽はそれ自身「自己創造者」でもなければならぬことになる筈である。実際、産出の始源においては、△一者▽が△英知▽を生むことよりも、△一者▽の自己創造が本質的に先立つと考えてよいのではないだろうか。まずこの点から出発してみたいと思う。

△一者▽が現にそのようにあるのは「彼の本性が常に欲して、また現に欲しているとおりのものである」<sup>208</sup>からだと言えよう。つまり△一者▽は「自分の意志どおりのものになることを望んだり、自分の本性を違ったものに転ぜしめることができようとも、他のものになるのを望ま<sup>209</sup>ず、また、今あるのは何らかの強制のゆえにでもない、<sup>210</sup>というのである。△一者▽の成立は、「気に入る」・「選ぶ」というような「選択可能性」ゆえに生じたのではなく、△一者▽それ自身の裡に「自己選択と自己への意志」が融合しているのであり、それゆえに△一者▽の自己創造は、如何なる偶発的なものでもなくまた、それ以外のものになる可能性も意味しないのである。

しかしそうするとこの「意志」には、次のような疑問が生じざるをえない。ひとつは自由選択を前提とした意識としての意味がないといえるのではないだろうか。<sup>211</sup>幾つかの欲求の原型があって、その中からどれかを選ぶという因果系列はそこには関与しえない筈である。それからもうひとつは、「時間的経過」の次元で考えても妥当しないのではないだろうか。なぜなら意志↓自己創造↓存在という時間的理解は、同時に存在↓自己創造↓意志という反芻とも同化しているのであって、認容しがたいものであることになる。仮に時間的に翻意してみても、これらは全く同時になしえていると言わざるを得ないであろう。しかもその時性とは、意志・創造・存在のみにかかわるだけではなく、△一者▽の持つ

本性の全てが該当すると考えられるのである。<sup>28)</sup>

それゆえ、△一者▽はまた同時的な本性の発露という点で、次位のもを同時に生み出していると考えられる。ここで特に意志的契機を吟味する必要があると思われるのは、同時性という点で考えてみた場合、△一者▽が△英知▽を産出するの、自己創造と同じ様に「生もうと思つて生む」とか「生まざるを得ない」などの意識とは無縁ではないかと考えねばならないことである。<sup>29)</sup>△一者▽が△英知▽を生む過程は、前述したような「自己の本質的活動を他者をして現成せしめる」という観点から整理すると、次のように言うことができまいだろうか。

△一者▽は、自己の本質を現成するがゆえに△英知▽を生む。英知を生もうと意志した結果生む、というように「生む」という目的ゆえに意志するのではなく、△一者▽が△一者▽たりうることを意志する。そしてそれが、△英知▽を自発的に生み、その結果、△一者▽は△一者▽の意志に由来して生み出されたことになる。これはまた、△一者▽に本質的といえる同時性において認められ、△一者▽の本質的活動と本質から由来した活動は、まさに「生む」という点で相即・未分化となっている。

しかし、このように観望してみると、△一者▽の創造・産出においては、意志的契機とおぼしきものは確かめても、その内実は、そのように呼ぶには余りにも消極的な中味になっているように思える。それよりも、「意志」として捉えることが難しいとさえ思えるのである。

「意志」はここでは、創造・産出の契機として介与している訳ではなく、自己意識の所産<sup>30)</sup>としてある訳でもない——△一者▽がそれ自身であるという原動力になつていてただとしか到底考えられないのである。創造・産出の中で「意志的契機」を構成すると、それは「自己の本質を自発的に必ず在らしめる」という意味に受取れると思われる。つまり、「自発性」と「必然的結果性」とが同化しており、「何ものにも強制されずにかならずそのように生み出す」という意味になると考えられる。従つて、

それ以上の意識——どのようなものを生むかなどという——とは全く無関係である。たとえ「一者」が自己自身を現に欲したとおりのものになっていることは、次位にあるものもそうであるのだと考えることはできるとしても。

このような「意志」の内容は、生む者が自己を自己たらしめ、生まれる者をそのように在らしめる力という意味が大きく、裏返せば、「必然的なもの」の原動力ということになるといえようか。つまり、「意志」と「必然」とは双方が両義的なものであり、何らかの観点から分断されてしまっただけなのではないだろうか。

例えば、「流出」に沿って整理してみよう。端的な特徴として「流出」は、存在するものの階層化を形成する。それは、下位のものが上位のもの「似像 (モ、モ、モ)」として生まれることである。この場合、上位者の意志とは、自己の似像を何ものにも拘束されず自発的に必ず在らしめるという様に捉えられる。

しかし、生む側ではなく生まれる側に立って考えてみた場合、生まれてくる者は必ず前位者の「似像」として生まれてこざるをえず、前位者の本質が必ず分与されて存在する結果となる。つまり次位者は、自己存在を左右する自由がなく、「必ずそのようにならざるをえない」のである。生まれてくる者は、一方向しか向くことができなかつたかの如く存在させられ、自発的に存在するとは言えないことになる。即ち、生まれる者からみた場合、「必然的」といふべき様相を呈してしまうといえるのではないか。<sup>63</sup>

このように「流出」の視座からは、先にみた両方の意味が、観点の相違によって泛き上がってくる。成程、それが意志というにはその内実は極めて希薄なものである。<sup>64</sup>しかしプロティノスは、創造とその体系化を形成する原動力として生む者には積極的に意志を附与しているのではないだろうかとも考

えられる。とはいえ、意志が自己意識として把握できない以上、結果的には「必然的」という内容と同化していると考えたくなるのである。<sup>83</sup>

### 3. 意志的契機に内在する問題・まとめ

以上素描してきたように、△一者▽の産出活動に意志的契機を認めるか否かという問題は、「意志」の両義的意味に遡及できると思われる。しかし、もっと端的に、△一者▽の一切の関係を絶した絶対的自己内在性による、純粹で無媒介な単一性から意志は「ある」とも「ない」とも唱導することも可能かも知れない。<sup>84</sup>

しかしプロティノスが、意志的契機があるともないとも言うことについて、△一者▽の本性から単純に演繹できると考えるのもまた十分ではないと思われる。寧ろ、創造における意志的契機そのものが何らかの問題を孕んでいることを検討する必要があるように思われるのである。

先にとりあげたように、意志といわれているものを吟味すれば、人間的な意識活動の内容は根本的に稀薄であることは、プロティノス自身全く気づかなかったことではあるまい。というより、そうせざるをえない問題があるのでないか。その問題とは、創造の根拠を意志的契機に還元することが、常に△一者▽の本性の中に变化・偶然性を前提することになると見做される恐れがある点である。

創造者が創造に際し、ただ創造しようと思志したがゆえに創造がなされたということは、創造が創造者の自発的なものであり、ひいてはその万能性を弁証する意味を持つことになる。<sup>85</sup>しかし、このような創造者の意志的契機の附与は、生まれてくる者が創造されるか否か、またその存在自体が全て創造者の考えに左右されていることも見逃せない。創造者が生まれてくる者の存在を左右するということは、創造者の意志が創造に際し「たまたまそのように創った」という偶然性や成りゆき性を多大に

持っていることにもなる。このことは、創造者の意識の変化を前提することになり、更には創造における時間的系列の理解、創造者の人格性の附与といった問題に立ち向かわざるを得ないのである。

△一者▽に意志的契機を全面的に援用してしまえば、当然次のような結果になるであろう。つまり、△一者▽はその時々気分や状況で、違ったものを生み出すことになる。そうすると△一者▽は△英知▽を様々に産出してしまえばかりか、自己自身でさえ偶然に生み出すことになり、「自足者」などとはもはや言えなくなってしまうのである。<sup>38)</sup>

プロテイノスがⅥ・8などで、意志の問題を扱う際に、大変周到に偶然性や成りゆき性を否定している点でも、またひいては執拗とも言えるグノーシスへの駁論をみても、彼が△一者▽に意志を想定する場合、まずこの問題に直面したのではないかと思われるのである。<sup>39)</sup> もう少し敷衍して考えるならば、彼が△一者▽に意志を想定する場合をみても、彼は△一者▽そのものを外在的に捉えているというよりは自己意識内で極めて精緻に論理的整合化をはかっていたのではないかと思われる。<sup>40)</sup>

つまり△一者▽は、意識外に厳然と屹立するものではなく、プロテイノス自身の意識の中で、遡及され整合化されてゆく過程を論理づけてゆく△究極因▽的な様相を示しているのではないだろうか。<sup>41)</sup> △一者▽がそのような、「小宇宙」としての個人の意識の中で最も根源的に辿りついて測定された性質と考えるならば、ここで扱ってきた「意志」の問題にも大きく影響してきており、プロテイノスの問題意識の整合化のひとつとして観ることができるようと思われるのである。

(一九八七・一・二六)



註

(テキスト) 本稿は主としてプロティノスの原典を以下の順で使用した。

- ① P. Henry et H.-R. Schwyzer' Plotini Opera (I ~ III) (1964 ~ 82, Oxford)
- ② R. Harder' Plotinus Schriften (I ~ V) (1956 ~ 67, Hamburg)
- ③ A. H. Armstrong' Plotinus (I ~ V) (1966 ~ 84, London)

\* \* \*

(1) 本稿は世界創造の問題に焦点を当ててはいるのではなく、プロティノスが最も根源的に産出活動を想定する「一者」に焦点を当てている。

(2) Enn. W. 8.20.18 (以下 Enn. を省略)

(3) cf. V. 4. 1.35

(4) cf. W. 8. 7, 8 ここでプロティノスは、「一者」が如何なる他者によっても動かされることなく、「自主性」は否認しえないことを強調している。

(5) プロティノスは「一者」について、しばしば「自足者 (αὐτάρκεια)」という表現を使う。例えば W. 9. 1. 9 など。

(6) cf. W. 8.20.18, 27 など。「似像 (μικρομορφία)」については2章を参照。

(7) W. 2. 2. 11

(8) V. 3.15.16 テキストは Harder に従って「熟慮」の意味を強調する。

(9) 本稿は、野町啓『初期クリスト教とギリシャ哲学』(創文社)における「創造と必然性」(P. 163 ~

190) に多くの示唆を得た。しかし本稿では、意志的契機を、野町が批判しているような積極的肯定として観るのではなく、結論はほぼ野町に近いと思われる。プロティノスが呈示した意志の様相を可及的に彼自身の考え方の中に位置づけることがこの稿の目的である。

⑩ 例えばⅡ. 1. 1. 2~4; Ⅱ. 9. 3. 12; Ⅲ. 2. 1. 20~25など。

⑪ V. 1. 6. 27など。成熟・完全の域に達したものは、自らその儘の状態でいることに耐えられなくなり、自己に固有の本質を発出してしまふ。所謂、「流出」である。

⑫ 彼は V. 4 において、「火」の譬えを用いながら、△本質的活動∨と△本質に由来する活動∨という2つの活動を区分づけたうえで、△一者∨と△英知∨にそれを当てはめ、生む者の本質をまさに生むという活動に求め、生む者と生まれた者との必然的關係と両者の本質的な区別とを示唆している。

cf. 野町前掲書 P. 173.

⑬ 例えば W. 8. 13. 47~50では、用語の使い方が説明のために必ずしも厳密ではないこともあるとプロティノスは注意してゐる。

⑭ W. 8. 9. 9~13; W. 8. 13. 5~11, 25~40, 43, 50~58など。

⑮ W. 8. 13. 29~30

⑯ △一者∨の単一性については、至る箇所述べられており、「自足性」や無媒介的・直接的「一」性が強調されている。ex. W. 9. 6. 18~20; Ⅱ. 9. 1. 1~4 etc.

⑰ △一者∨の「一」とは、一切の同一性を超える単一性 (ἀπλοτης)・単純性 (ἀπλότης) としてのみ解することができる。例えばプロクロスでは『プラトン「パルメニデス」註解』の中で、△一者∨の性質を4つの命題に分けて解明しているが、△一者∨はそれ自身と異ならず、他者と同一でもなく、他者でもなく、自己と同一でもならず (同書 1188, 41; 1079, 30). W. Beierwaltes

Proklos, Grundzüge seiner Metaphysik (1965, Frankfurt am Mein) p. 61 ~ 71, 343 ~ 394 etc.

㉞ 注㉞を参照。W. 8. 13. 47 ~ 50 etc.

㉟ W. 8. 20. 24 ~ 27 へ一者∨の自己創造性がそれが絶対的（非関係的）なものであり、それもまた

へ一者∨の全体であることをプロティノスは注意している。

㊱ W. 8. 13. 37 ~ 38

㊲ W. 8. 13. 33 ~ 35

㊳ W. 8. 13. 36 《ὑπο ἄναγκης》は「必然のゆえに」であるが、この場合は、「外的な圧力ゆえに」という意味にとれる。

㊴ W. 8. 13. 41 ~ 46

㊵ W. 8. 18. 30 ~ 32 ; 38 ~ 43 意志を自由選択の意識とすれば、「たまたまそうであった」という偶然性が介入してくるといえる。しかしプロティノスは創造における偶然性をきっぱりと否定している。3章を参照。

㊶ しかし、へ一者∨の自己創造は永続的なものではなく、一回きりのものであるとプロティノスは述べている。ex. W. 8. 21. 7 ~ 8

㊷ へ一者∨に熟慮や義務感を想定させることは、結果的に「主体-対象」の自己同一化として、へ一者∨を二分化してしまうことになる。

㊸ 註㊸参照。

㊹ へ一者∨が自己創造しかつへ英知∨も同時に産出しているのは、意志された創造的な力であることが W. 8. 18 でまとめられている。

㊺ 註㊹参照。自己意識とは謂わば知性と存在とに二分化するのである。しかしへ一者∨はこのような

二分化を肯じえないものである。cf. V. 1. 4; W. 8. 20. 18 またこのような分割を主張するグノ  
ーシス派に対して厳しく言及していることも見逃せない。ex. II. 9. 1

80 「そのように生む」とは自己の「似像」を生むことであり、それは自分より劣性のものを生むこと  
も意味する。

81 野町前掲書 P. 182. 「意志」の意味はほぼ野町の「必然的」の解釈に合致することになる。

82 野町前掲書 P. 182 のほか、E. R. Dodds' *Pagan and Christian in an Age of Anxiety* (Cambridge, 1965) 「邦訳 (日本基督教団出版局) では P. 110」<sup>67</sup> また A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being* (Harvard U. Pr., 1936) 「邦訳 (晶文社) p. 64~69」などを参照。cf. V. 12. 40~49.

83 Dodds はこれを「相互性の欠除した一方通行的なもの」と述べている。前掲邦訳書 P. 110 また  
Lovejoy はこのことをプロティノスの「決定論」として捉えている。

84 このことからして「意志的契機」というには消極的すぎ、寧ろそれは存在しないと考える方が多  
い。しかし、人間的な意識活動とは言えなくとも、キリスト教創造論におけるそれと単純比較して  
「意志的契機はない」と決めつけるのは疑問である。

85 「流出」にあてはめて考えると、意志の働く方向が「下降 (katabolē)」、必然性を強調す  
る方向が「環帰 (epistrophē)」といえる。

86 へ一者√が肯定神学的に「あらゆるものである」ともいわれ、かつ否定神学的に「いかなるもので  
もない」ともいわれうるとしてもそのように考えられる。クレーマー (K. Kremer) は一連の見解  
では V. 1. 6. 25~27 に否定神学的発想を読みとり、意志的契機を主張する。Die neuplatonische  
Seinsphilosophie und ihre Wirkung auf Thomas von Aquin (1966) など。なお、野町 (前掲書 P.  
170 註③) の他に、山田晶も『在りて在る者』(創文社、p. 6~10) で批判的にこれを取りあげ

ている。

⑧この内容については、キリスト教弁神論の方法と併せて、野町前掲書P.165～167.

⑨これは、(immutabilis)としての自足者が△一者▽に想定されているのではないか、と思われる。

⑩プロティノスは意志の問題の中で「偶然・成りゆき」性を否定している。ex. W. 8. 14. 35～36 ; W. 8. 15. 23～24 etc.

⑪I. 9. 3. 10～14 ; 7, 1～2 ; 8. 2～5 etc.この中でプロティノスはグノーシスにおける創造者の境遇の変化、意志の変化、悪質なる熟慮を徹底して批判しており、却って自分の立場に意志的契機の否定を裏付けるような意味を濃くしているように思われる。

⑫E. Ivánka, Plato Christianus (1964). Ivánkaの説明に肯じるものとして野町前掲書P. 185など。筆者も Ivánkaに同意する点が多い。

⑬大宇宙を個我の中に透映して、ミクロコスモス化する在り方は、古典古代後期から中世にかけて「メロテシア (Molothesia)」として絵画化されていた事実からも首肯ける。「メロテシア」とは人間の四肢 (μ ε λ α τ η) を占星術のホロスコープに当てはめて図像化するものである。Friz Saxl, Lectures (Macrocsm and Microcsm in Mediaeval Pictures) (London, 1957)。邦訳は『シンボルの遺産』(せりか書房) P. 41～59.